



すべての猫好きに捧ぐ

## 『夏への扉 新版』

出版社：早川書房(ハヤカワ文庫SF・刊)  
ISBN：978-4-15-012309-3

ロバート・A・ハインライン・著 福島 正美・訳

タイムトラベルの物語は、誰にとっても「最初に出会った一作」がいちばん心に残るのかもしれません。『バック・トゥ・ザ・フューチャー』『ドラえもん』『ハリー・ポッター』『時をかける少女』——時を超えて愛されている多くの作品に共通するのは、終盤に訪れるあの爽快感です。ばらばらだった出来事や感情が、時空を行き来することで一つずつつながっていき、最後にぴたりとパズルのようにかみ合う、その過程がたまらないのです。

『夏への扉』の主人公は、1970年に生きる30歳の技術者。裏切りと喪失を経験した彼は、自らを冷凍睡眠に託し、2001年の未来で人生をもう一度やり直そうとします。科学の力や技術への信頼、学び続けることで未来を変えられるという希望。そして同時に、大人だからこそ味わう人生の苦さと再生が、軽妙な語り口の中に描かれます。

この小説が書かれたのは、なんと1956年。70年近く前の作家が思い描いた“未来”の答えあわせができること、それもまた、本が与えてくれる“タイムトラベル”の楽しみ方なのかもしれません。現代の読者のために、新訳版が刊行されています。初めて読む方にも久しぶりに扉を開ける方にも、きっと何かが響くはずです。

・桶川図書館に蔵書があります

桶川市立中央図書館スタッフが選んだオススメ本

「夏のものがたりを読む」

『ふたつの夏』 谷川 俊太郎、佐野 洋子・著  
出版社：小学館 ISBN：978-4-09-386512-8

詩人と絵本作家、かつて夫婦だった2人による唯一の合作小説

『君が夏を走らせる』 瀬尾 まいこ・著  
出版社：新潮社 ISBN：978-4-10-468603-2

金髪、ピアス、16歳、少年のひと夏限りの育児奮闘記です。ずずかちゃんとの別れがせつない

『夏の体温』 瀬尾 まいこ・著  
出版社：双葉社 ISBN：978-4-575-24498-4

出会いがもたらす奇跡 優しさに満ち溢れる世界へ

『あなたの後ろにいるだれか』 恩田 陸 ほか・著  
出版社：新潮社(新潮文庫・刊) ISBN：978-4-10-180222-0

暑くなってくるこの時期にホラーを読んで涼んでみませんか

『サマータイム』 佐藤 多佳子・著  
出版社：新潮社 ISBN：978-4-10-123732-9

瑞々しい。夏の煌めきを感じる作品です。

『君の臍臓をたべたい』 住野 よる・著  
出版社：双葉社 ISBN：978-4-575-23905-8

表紙は春ですが、夏の物語です。胸が熱くなる青春小説です。

テーマに沿った本を図書館に蔵書があるものから選んでみました。図書館を是非ご利用ください。



## OKEGAWA hon プラス+とは

OKEGAWA hon プラス+イベントスペースでは、OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）が主催して博物館、大学、出版社等と連携し、桶川の市民サービス向上のため、子ども向けから大人向けまで幅広い世代を対象とした学びのサポートをしています。

▶OKEGAWA hon プラス+でのイベントの予定についてはこちらをご覧ください▶



おけがわマイン 3F  
〒363-0022 埼玉県桶川市若宮1-5-2  
**OKEGAWA hon プラス+**  
☎ 048-786-6353 桶川市立中央図書館  
発行者：OKEGAWA hon プラス+運営協議会（桶川市・株式会社新都市ライフホールディングス・丸善雄松堂株式会社）  
「202507」



# OKEGAWA

オケガワホンプラス

## hon プラス+ 通信

No. **30**  
不定期発行



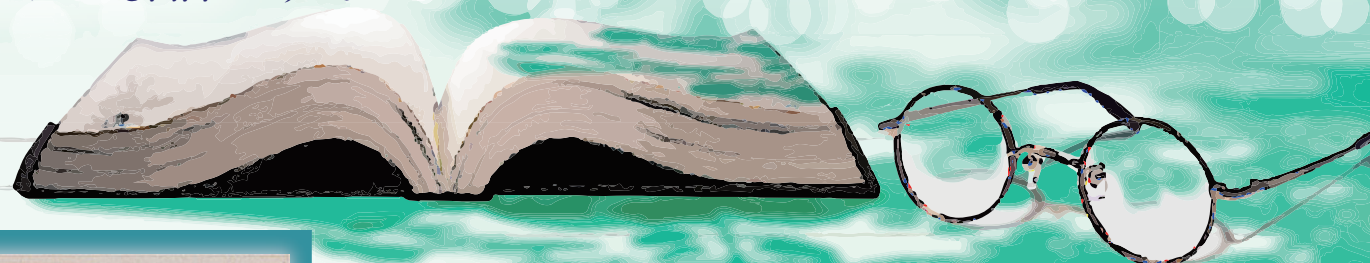
## テーマは 夏のものがたりを読む特集

今回のテーマは「夏のものがたりを読む」。

夏という季節、私たちは様々なことを思い浮かべるのではないのでしょうか。海や山、探検、お盆、里帰り、甲子園、花火大会、せみしぐれ、夕立、スイカ……。いつもとは違う長い休みを取って日常を抜け出し、普段とは違った環境で様々な経験、出会いをする季節です。また夏は、実家に帰って懐かしい家族に会うと同時に、お盆に帰って来る亡き人と再会する季節でもあります。

そんなドラマチックな季節を舞台にして、古今さまざまなものがたりが書かれてきました。今年の夏は、そんな一冊を手にとってみませんか。

今回ご紹介する本は、偶然ですが映画など映像化された作品が多くなりました。機会があったら、比べてみるのも面白いですよ。



## ひと夏の不思議な出会い①

### 『思い出のマーニー』

出版社：新潮社（新潮文庫・刊）  
ISBN：978-4-10-218551-3

ジョン・G・ロビンソン・著 高見 浩・訳

ここを閉ざした少女アンナは、親代わりのプレストン夫妻のはからいで、自然豊かなノーフォークでひと夏を過ごすことになりますが、そこで謎めいた「湿地の館」に住む不思議な少女マーニーと出合います。二人は親友となり、楽しいひと時を過ごしますが、アンナは突然姿を消してしまいます。彼女はどのようにしてなくなったのか。後半にその謎が明かされるのですが、ページをめくるのがドキドキするほどです。

孤独な少女のこころを表すかのような湿地帯の風景や自然を背景に、こころが通

じ合う二人の少女の喜びのやり取りが本当に素晴らしい。

そして最後は「アンナ、アーニー、出会えて本当に良かったね」と思えます。

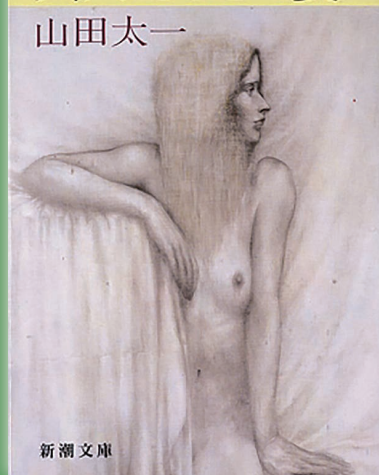


・中央図書館に蔵書があります



## 異人たちとの夏

山田太一



## ひと夏の不思議な出会い②

### 『異人たちとの夏』

山田太一・著

出版社：新潮社（新潮文庫・刊）  
ISBN：978-4-10-101816-4

片岡鶴太郎の名演が印象的な大林宣彦監督の映画でご存じの方も多いのではないでしょうか。原作は、テレビドラマ『ふぞろいの林檎たち』や『男たちの旅路』の名脚本家の山田太一さんが書いた小説なのです。



妻子と別れ、孤独な日々を送る四十八歳の主人公は、ある日悲しみを抱え、ふと故郷浅草へ足を運びます。そこで出

会ったのは、十二歳の時に死に別れた両親にそっくりの男女でした。信じられない気持ちを持ちながら、その懐かしい面影の二人をを繰り返し訪ねて、子どものように甘えてしまう主人公。

不思議な出会いがあるのも、夏だからかもしれない、と納得してしまいそうです。映画と同じ場面で涙を流しました。

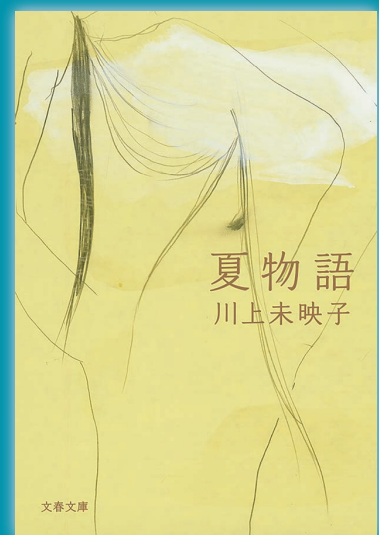
・単行本が中央図書館に蔵書があります

## この夏、一度も会ったことのない人に

### 『夏物語』

川上 未映子・著

出版社：文藝春秋（文春文庫・刊）  
ISBN：978-4-16-791733-3



川上未映子さんの作品の魅力は、登場人物の長いセリフ、「語り」の徹底的な本当らしさにあると思います。何気ないおしゃべりや、爆発する怒りの瞬間のなかにある言葉。それは故郷の言葉であったり、同時代を過ごしたもの同士だけに通じる言葉であったりと、どういう言葉を選んでいるかが、会話をしている人物との関係性をはっきりと表しています。表現の奥深さを感じられる、おすすめポイントです。

『夏物語』は、30代の主人公・夏目夏子を中心人物として、母としての女性像が率直に描かれている小説です。家族観が多様化するなかで、こういった家族を選択しつつっていくかということを、この小説を読み進めるにあたって、読者自身が主体となって徹底的に考えることが求められていると感じます。これは女性の物語であると同時に、思春期のための、親子のための、ひとりでいるための物語でもあります。10代から読めそうな小説ですが、年代や性別や環境によって、きっとまったく違った問題意識にぶつかることでしょう。

時代が賛否の岐路に立ったとき、新たな価値観を世の中に問うことができるのは、文学の大きな役割であると思います。600頁越えの大作でも、緩急のある見事な文体でいつの間にか読み終えてしまうので、どうか臆さず、この夏の読書にいかがでしょうか。

・単行本が中央図書館、坂田図書館に蔵書があります

## 愛と喪失のものがたり

### 『悲しみよ こんにちは』

出版社：新潮社（新潮文庫・刊）  
ISBN：978-4-10-211828-3

フランソワーズ・サガン・著 河野 万里子・訳



早熟の天才サガンが、18歳で書いたひと夏のものがたり。衝撃のデビュー作です。

18歳の少女セシルは、プレイボーイの父レイモン、その恋人エルザと南フランスの別荘で夏のヴァカンスを過ごすことになります。そこに聡明な大人の女性アンヌと、一途な青年シリルが加わって、愛と憎しみの複雑な人間ドラマが始まるのです。

とにかく作者と同じ年齢の主人公の、繊細で複雑、優しくもあり残酷でもあり、熱くもあり冷めている、愛しているかと思う一方で憎しみを感じる、その心理描写が素晴らしいです。（それに比べると大人たちが単純に見えてしまうのは、作者の年齢からしても、いたしかたのないところでしょう。）

改めて読み返してみても、一時的な流行で終わることのない、長く読み継がれる名作と感じました。



## 全部夏のせい

### 『結婚式のメンバー』

カーソン・マッカラース・著

村上 春樹・訳

出版社：新潮社（新潮文庫・刊）  
ISBN：978-4-10-204202-1



カーソン・マッカラース『結婚式のメンバー』は、村上春樹さんが広く読まれてほしい傑作と評した小説で、原作は1946年に書かれています。そして現代、村上春樹さん自身が翻訳したものを文庫本で読むことができるなら、とても贅沢な余暇の過ごし方になるのではないのでしょうか。

この物語の舞台はアメリカ南部の小さな町で、長い夏休みの間の、少女フランキーの物語。フランキーは12歳で、大人の世界に憧れながらも子どもであることに縛られています。自分が世界のどこに位置しているのか分からないという混乱、どこにも属していないかもしれないという不安、それは、思春期を経験した誰もが心のどこかに覚えのある感覚であると思います。

派手な物語の筋や大きな事件があるわけではありません。家政婦のベレニスといとこのジョン・ヘンリーとの会話文が印象的で、3人が何気なく集まる台所のなかで、それぞれが抱える多くの孤独や希望を寄せ合うおしゃべりが湧いては、黄昏時に溶けていくようです。

どこかへ行ってしまうみたい、違う自分になりたい。そう口に出してしまうのも全部夏のせいにして、まるで自分のようでもあり、世界中の誰にも似ていないようでもある12歳の少女とともに、ひとつの気だるい夏を乗り越えてみるのはいかがでしょうか。